

介護保険申請に至るまでの 経緯を明らかにする

～ 介護保険サービスに結び付ける為には何が必要か ～

地域事業課 鈴木丈之 伊藤亜矢

①研究目的

- ▶ 本研究は、認知症を持った人が介護保険申請に至るまでの経緯を明らかにし、よりスムーズに介護保険サービスに結び付ける為に何が必要か考察し、地域課題や専門職としての課題を抽出する事を目的とする。



②調査対象

- ▶ 介護保険申請のきっかけが認知症であった人の家族5名を調査対象とする。



③調査方法

- ▶ 介護保険利用者の家族に対し、介護保険申請に至る経緯をインタビューした。



④分析手法

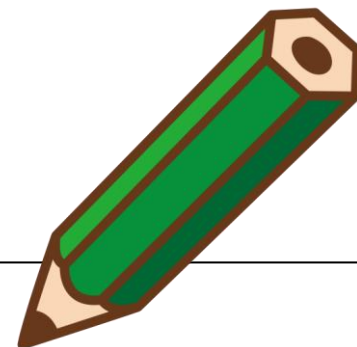
- ▶ インタビュー内容をもとに逐語録を作成し、類似性があるものをサブカテゴリー化する。
その後カテゴリー化し、さらに領域に分けネームを付けた。

⑤結果

- ▶ インタビューから得られたコードは全部で65コード
サブカテゴリーが22、カテゴリーが9、領域3で構成

<3つの領域>

- 地域課題
- 本人・家族
- 困りごとの認識



<領域> 地域課題

カテゴリー	サブカテゴリー	主な内容(コード)
地域とのつながり	地域の人との日常的な親交の有無	近所の方がデイサービスを使っているのを知っていた。 近隣住民とトラブルがあり、組つきあいもしていない。 買い物は近所のYさんをお願いしていた。 勤めていた会社の無尽に行っていた。
	相談者の有無	姉と相談して介護保険の申請を行う事に決める。 近所付き合いがなく、夫婦二人暮らしの為、相談できる人がいなかった。 同居の娘夫婦がいるが迷惑はかけられない。
専門機関との従前からのつながり	医療機関との従前からのつながりがある	以前受診した開業医が脳外の専門と知っていた A病院のもの忘れ外来を受診した。以前から胃潰瘍などで入退院しており、先生の事もよく知っていた。 C病院に1人で受診していた。
	介護事業者との従前からのつながりがある	K事業所の事を知っている親戚と見学した。 NPOを通じてくわのみと繋がりがあったので相談し、介護申請に至った。
専門職の支援力	認知症カフェなど初期の認知症の人や家族を支える事業の不足、あるいは専門職側の知識不足	A病院からは介護保険やその他の支援は勧められなかった。 (B病院を受診したが、)病院から申請を勧められる事はなかった。 申請の5～6年前からDクリニックで認知症の診断を受けていたが申請を勧められることはなかった。
	専門職側の意識	病院や周囲から介護申請を勧められる事はなかった。 A病院からは介護保険やその他の支援は勧められなかった。

<主な内容(コード)>

<サブカテゴリー>

<カテゴリー>

「買い物は近所のYさんに
お願いしていた。」



地域の人との
日常的な親交の有無



地域との繋がり

「病院や周囲から介護申請を
勧められることはなかった。」



専門職側の意識

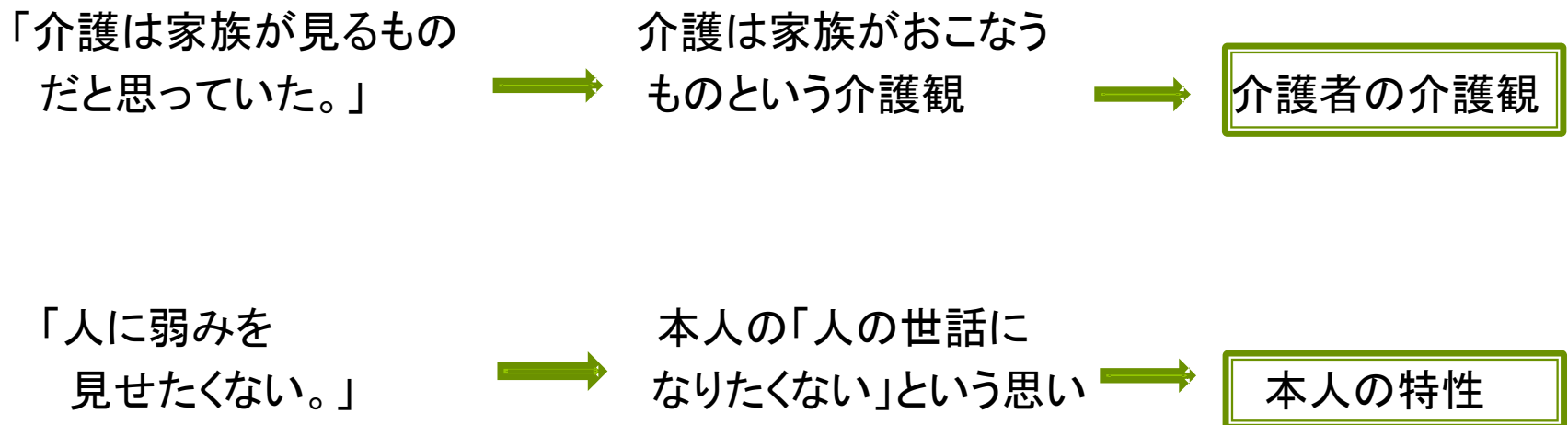


専門職の支援力

<領域> 本人・家族

家族との関係性	キーパーソンとの関係性	元気な頃から喧嘩が絶えず、本人と介護者の関係は良くなかった。 忘れる事や出来ない事が多くなり、介護者が怒る事が毎日ある。 年2回の帰省以外電話等もなし。 息子と県外まで食事にでかける。
	同居人の存在	同居の父がしっかりしていた為大丈夫だと思っていた。 (申請前)同居していたので身の回りの事は家族が行っていた。
	子どもや頼れる親戚の存在	子どもがいない。頼れる親戚もいない。 娘が要介護者で婿は娘の介護で頭がいっぱい。
介護者の介護観	介護は家族が行うものという介護観	可能ならば家族が介護できると良いと思う。 介護は家族が見るものだと思っていた。 申請には思い切りや覚悟がある。
	介護サービスは積極的に利用するものという価値観	介護サービスは積極的に利用したほうが良いと思っている。 詳しく知らなかったので、市役所に相談に行った。 使うべき時が来たら使えばいいと思う。
知識の有無	介護保険の知識の有無	自分の仕事が障害関係。 近所の方がデイサービスを使っている。 母が介護保険を使っていたので、ある程度は知っていた。
	認知症に関する知識の有無	(最初に異変を感じた時点では)認知症を疑っていなかった。 認知症になっても何とかかなと思っていた。
家族の特性	家族があまり深刻に捉えない性格	あまり深刻には受け止めなかった。 同居の父がしっかりしていた為大丈夫だと思っていた。 生活に支障が出るまでは大丈夫と思っていた。
	家族の行動力	介護申請する時には特に躊躇しなかった。 物忘れがある事に気づいてから、4~5年後に申請した。 最初の異変から2年後に申請した。
本人の特性	本人の性格	受診には抵抗がなかった。元々無口な人だった。 人の目を気にする性格。 婦人会の長をやるほど、しっかりしていた。
	本人の「人の世話になりたくない」という思い	人には頼りたくない。プライドが高くまだ自分でできている。 人に弱みを見せたくない。

<主な内容(コード)> <サブカテゴリー> <カテゴリー>



<領域> 困りごとの認識

日常生活上の大きな支障の有無	日常生活における大きな支障がない	生活に具体的な支障が出始めるまでは申請は考えなかった。 2～3年は日常生活に支障なく経過。 生活に大きな支障もなかったため、そのまま様子を見ていた。 常におかしな症状がある訳ではなかったため、まだ大丈夫と思っていた。 トイレと食事以外出て来なくなった。
	身の回りの事に支障がでる。	家事や金銭管理ができない。 身だしなみに気を遣わない。 会話が成り立たなくなった。 言ったこと聞いたことをすぐに忘れてしまう。
	生命の安全に関わる事態が発生	留守番中にエアコンを付けなかったり、食事を摂っていないなど一人で安全に過ごす事が難しくなった。 カーブを大きく回ったり、降りるインターを間違えたりと運転に支障が出てきた。
周囲への迷惑による問題意識の強化	他者への迷惑が発生	近所のYさんの所に大量の洗濯物を持っていき、お願いすることもあった。 転倒、病院受診の際にお金を持っていなかったり、人の傘を勝手に持ってきたりと状況が悪化。 お店で支払いを間違える。 「買い物に行きたい」と近所に人に毎回お願いする。
	周囲からの指摘によって問題意識が強化される	(地域の人との関わりの中で)周囲から指摘されるようになった。 ご近所同士で生協を注文していたが、自分が注文したものが分からず違う商品を持ち帰るようになり、仲間から指摘される。 (自宅に出入りしている)弟子たちから指摘される事が多くなってきた。

<主な内容(コード)>

<サブカテゴリー>

<カテゴリー>

「カーブを大きく回ったり、
降りるインターを間違える等
運転に支障が出てきた。」

生命の安全に関わる
事態が発生

日常生活上の
大きな支障の有無

「(地域の人との関わり
の中で)周囲から指摘される
ようになった。」

周囲からの指摘に
よって問題意識が
強化される

周囲への迷惑による
問題意識の強化

⑦ 考察

【 地域課題 】

- ▶ 〈地域とのつながり〉、〈専門機関との従前からの繋がり〉、〈支援者の支援力〉が介護保険申請に対し大きな意味合いを持つのは明らかである。認知症カフェやサロンなど様々な活動を通して要介護状態に陥いる以前から、住民同士あるいは専門職や専門機関と繋がる事が大切である。一方で支援機関と繋がっていても、適切な助言を受けられない等の実態は課題である。

⑦ 考察

【 本人・家族 】

- ▶ この領域の存在は、本人や家族の特性、介護観、知識が介護保険申請のタイミングに影響する事を示している。介護サービスの利用が「権利」であるという認識や介護保険の知識の啓発、普及が介護保険申請のハードルを下げると教えられる。

⑦ 考察

【 困りごとの認識 】

- ▶ 本領域は介護保険申請に到るまでの経過として、生命を脅かす状況や周囲への迷惑行為の発生など、本人や家族が著しい困りごとを抱える事が介護保険申請の行動の動機として重要である事を示している。早い段階で介護申請に至るには何らかの理由により、問題意識が強化される必要があると考えられる。

⑧結論

- ▶ 認知症の人や家族にとって重要なのは、早期発見や早期治療、あるいは早期に適切なサービスが介入する事で、本人と家族が共に安心を得て、ストレスなく過ごすだと考えられている。介護保険申請はその為の重要な段階である。本研究では、申請に到る経過には本人、家族の特性や知識、専門機関や地域住民同士のつながり、問題意識の大きさの程度が関係している事が示されている。より適切な時期に介護保険申請に結びつくためには、認知症カフェのような活動を通して、①認知症や介護に関する知識と意識の啓発、②住民と専門機関とのつながりをつくる、③専門機関同士がつながり、学び合えるような事が重要であると考えられる。